小西増太郎覚書（一）

杉井六郎

目次

はしがき
(一) 生年と勉学・就業
(二) 東京に出てニコライ神学校に学ぶ
(三) ロシア遊学
(四) トルストイとの老子道徳経の翻訳
(五) 正教会神学校教授、そしてロシア思想界の紹介者

はしがき

「恰も洗礼の約翰（ヨハネ）の如く、皮の帯を締め、露国百姓の常服を著け、純然たる農夫」とトルストイの風貌を伝えたのは、『国民之友』三二四号（明治二九年一二月五日発行）に掲載された蘇峰徳富猪一郎の「トルストイ翁を訪ふ」の一節である。長文のこの訪問記は明治の日本人にトルストイを身近なものにすることに大きな役割を果たした。もちろん、従来知られているように、森鷗訳の『泣花怨柳北欧血戦余塵』（『戦争と平和』の一節）の刊行はすでに、明治一九年のことであり、爾後トルストイの紹介は行なわれていた。しかし、明治二〇年代のトルストイ紹介あるいは東欧

文学の紹介は、その英語訳からなされたものであり、いわば欧米において宣伝されるものを紹介・披露する体のものであった。しかし、徳富猪一郎のトルストイ訪問に紹介の便宜を図り、やがてトルストイをはじめロシアの文学、思想、哲学、はてはその歴史、人情、風俗にわたって、これを紹介し、日本の近代の思想史の枠組のなかで、ヨーロッパと併立するロシアの存在が注目すべきだと主張した小西増太郎はロシア語から直接、これを日本に導入する役割を担った人の一人であり、老子のロシア語訳をトルストイと行なったことで有名である。

由来、この小西増太郎には、そのトルストイとの交渉経緯を語る自叙伝『トルストイを語る』（昭和一一年一〇月刊岩波書店）があり、およそ日本におけるトルストイに言及し、これを論ずる場合には、この書物に依拠することが行なわれてきた。ところが、昨年、柳富子は「明治期のトルストイ受容」（『文学』四七巻一〇号）のなかで、『トルストイを語る』に述べられている小西のロシアからの帰国の年月に疑問をはさまれた。本稿はこれを機縁として、年来の宿構である「近代日本思想史における東欧社会――日本におけるトルストイ」の基礎作業の一部を、さしあたって小西増太郎がロシアから帰国して活躍するまでの時期に限って、その行実を追跡したものである。

小西増太郎の場合、その回顧記事である『トルストイを語る』には、実のところ、記憶違いが多い。したがって、筆者はその履歴をたしかめるために京都大学所蔵「旧高等官講師履歴書自大正二年八月至大正七年五月綴」（自筆履歴書ではなく、事務官の浄書履歴書）に収められている小西増太郎の履歴書（以下履歴(甲)と称す）ならびに同志社社史史料編集所所蔵小西増太郎履歴（事務所浄書履歴書、以下履歴(乙)と称す）を参酌し、ハリストス正教会の機関誌である『正教新報』を基本にしながら、当代の『基督教新聞』、『六合雑誌』、『国民之友』などによって、その行蔵を正しく窺うことにつとめた。

一般にその記憶のあやまりはあり、回顧録のみをその最後の典拠とすることには慎重でなければならぬことは言うまでもない。小西増太郎の場合には、履歴書にも異同が見られ、あらためて近代史における事実確定のむづかしさを示すものと言えよう。本稿は、小西の留学した学校の所蔵記録ならびにソ連における関係学会雑誌の渉猟がいまだに不十分であり、なお、疑問をすべて解消するものではないが、少なくとも、小西のロシア留学出発は、明治二〇年五月一日横浜出帆――回顧録である『トルストイを語る』では明治一九年春とし、履歴書（甲）も一九年四月とする――であること、そのロシアからの帰国、東京帰着は明治二六年一〇月二九日――『トルストイを語る』は明治二八年一二月、履歴書は（甲）、（乙）とも明治二五年一二月とする――であることを明らかにし、その生年以来のかれの行蔵を年譜風に整序した形をとらず、調査の段階を追って覚書風にしるした。

なお「近代日本思想史における東欧社会――日本におけるトルストイ」は、かかる基礎作業の厳密な検討とその集積を要するために遅々としてその進捗をみないでいるが、拙稿「反戦思想」（『日本思想史講座』「近代の思想2」所収）ならびに「蘇峰の欧米旅行――ロシア巡遊」（『徳富蘇峰の研究』所収）は一連の視角のなかでとらえようとするものであり、参照されたい。

一　生年と勉学・就業

小西増太郎は文久二年（一八六二）四月、岡山県（備前国）児島郡味野町三九五三番地に生まれる。これはかれの履歴書にもとづくものであるが、なお、その出生の日付は両履歴書にも記載がなく、これを知ることができない。[1] 現在まで、出生地の調査を十分なしえなかったので、その「族籍」に関する記載は「平民」としているが、その家の歴

史、資産などに及ぶことができない。

学歴（職歴）のはじめは、詳しく記載されている履歴書（甲）によると、「明治四年　岡山県上道郡国富村立小学校入学／〃七年　旧島田組事務見習トナル／〃九年　岡山県児島郡味野町野嵜武吉郎事務員トナル」とあるが[2]、別の履歴書（乙）には「明治七年四月　岡山市外操山小学校卒業／明治九年ヨリ一四年マテ岡山県豪農野崎武吉郎秘書役勤務」としるされている[3]。

まず上道郡国富村立小学校については、後の呼称と思われ、『文部省年報』（明治七、八、九年）の「岡山県公立小学校表」には備前国上道郡内の小学校名として見当らない。また岡山市外操山小学校については「操山　上道郡門田村　教員三　生徒男五五　女三〇」（『文部省第二年報』明治七年）、「操山小学　上道郡門田村　設立明治七年　教員三　生徒男一一四　女七一」（『文部省第三年報』明治八年）、「操山小学　上道郡網浜村　設立明治七年　教員三　生徒男一四一　女八七」（『文部省第四年報』明治九年）と見え、門田村にあったものか、網浜村にあったものか、にわかに判定できない。しかし、小西がその土地の小学校をおえ、さらに「上等」の小学校（彼の場合は操山小学校）に通って、その初等教育をうけたことが推定される。小学校の課程をおえて、履歴書（甲）には旧島田組事務見習、ついで野嵜武吉郎事務員とあり、（乙）には、たんに野崎武吉郎秘書役と見え、ともかく、若くして社会の実務についている。

野崎武吉郎は児島郡味野の人であり、明治四年岡山県会計係に出仕、翌五年学問所総括兼会計元締、六年勧業掛員になり、のち辞して祖父の遺業をついで製塩業の改良発達を企図して鉄釜を創製し、測候所を設け、化学実験室を新設するなど製塩に新機軸を開いた人望の高い実業家であった[4]。なお、履歴書（甲）によると、明治二九年六月から四二年八月まで「岡山県野嵜武吉郎資産部総務」を勤めたとあり、（乙）には明治三〇年三月「野崎武吉郎総務長トナ

ル」とあって、かれは二〇歳以前にかって勤めた地元実業家の経営した要務を再び担当している。野崎は「家富み財足るも亦浮華驕溢なく」、「振恤に尽せしものに至りては、真に枚挙に遑あらす」と評された篤望のある人であり、小西が若い日に享けた実業家の精神はきわめて大きいものがあり、共鳴するものがあったからであると思われる。

二　東京に出てニコライ神学校に学ぶ

小西増太郎の自ら語るところによると、「十七、八歳の時、何と云ふ理由もなく、唯だロシヤ語が学びたくて東京に出た。東京では故ニコライ師に乞ひ、彼の設立してゐた露語学校で、てほどきして貰ひ」と、東京に出て、ロシア語をニコライ神学校で勉強しはじめることを述べている。(5)

小西が「何と云ふ理由もなく唯だロシヤ語が学びたくて」とあっさり述べた、上京・ニコライ神学校への入学の背景を探索することは容易ではないが、一つの手掛かりと思われるのは、ハリストス正教会の小西の生地にむけての伝道である。かれの上京は履歴書（甲）、（乙）とも明治一四年（満十九歳）のときとしるしているが、このころまで、すでに宣教師をこの地方に派遣し、ミッション・ステーションを設立していたプロテスタント・キリスト教のうごきには、アメリカン・ボードならびに同志社の神学生の伝道がある。ケーリの報告によると、伝道の領域は岡山を中心にして高梁、惣社、倉敷、西大寺、天城、下津川に及んだことが知られ、(6)岡山教会は明治一三年一〇月一三日に設立されている。したがって、若い小西がこれらのアメリカン・ボード派遣の宣教師もしくは同志社の神学生、あるいは同志社出の牧師（金森通倫）に出会う機会があって、あるいは「唯だ英語が学びたく、また真理を求めて同志社に入った」という事態が生まれても不思議ではなかった。それにもかかわらず、彼に「ロシヤ語を学びたくて」という思

考が成立したことは、ハリストス正教会系の伝道との出会いという別個の契機があったことが想定される。

現在渉猟の及んでいる『正教新報』によると、ハリストス正教会のこの地方に関する「教会報知」のはじめの記事は次の通りである。

備前の岡山には二三年以前より伝教者も交る〳〵派出して尽力せられたれと、今日に至るまて僅々の信者を獲たるのみにて、はか〳〵敷進歩のなきは畢竟是迄は裏坐敷又は二階などを講義所となし、専ら着実の方法を以て徐に伝道せしがため、自然来聴者も多からず、随て信仰に進む人も少なき訳なれはとて、此度伝教者津田氏は市中に恰好き貸家を借受け、以後は何分手広に伝道せらるゝよし。茲に同国児島教会の岡ペートルといへる兄弟は能く教会のために働らき、児島にては自己の居宅を以て会堂となし、伝教者の派出せし時は懇切に待遇なし、其費用なども自ら弁じて、聖言の広布を助る敬虔なる人なれは、唯児島教会に働くのみにあらず岡山教会にも深切に力を尽し居らるゝゆへ、此度津田氏の発意にて伝教所を設ることを聞き、深く喜ひ家税七円五拾銭の中毎月二円五拾銭ツゝ岡氏より寄附せらるゝ由。先に大宰ペートルといふ兄弟もまたよく正教のために務むる人なれと不幸にして盲目なり、されど琴をしらぶることに精しきゆへ、人々に愛られて諸々の家に招かれ、往所に正教を説さるはなし。所謂目に盲して心に盲せざるものにて、誠実を以て誘導さるゝゆへ、教会を益すこと少なからざる由誠に殊勝なることゞもなり。(7)

これによれば、ハリストス正教会の岡山伝道はアメリカン・ボードの宣教師派遣よりややおくれるが、やはり伝教師がかわるがわる派遣され、この時代にわずかであるが、すでに初穂が生まれており、伝教師津田（徳之進か）は伝道規模の拡大を図っていることが知られる。また児島教会の所在地はどこにあったか、いま知りえないが、ペートル岡によって自分の居宅を会堂にして「聖言の広布」が行なわれ、同労者にはペートル大宰もいることを知ることができる。とくに大宰の行蔵は「目に盲して心に盲せず」として、これを賞揚していることからも察せられるように、広く地平にひろがる伝道活動であったことが知られる。津田や岡や大宰らの伝教師の消息は現在これを知るすべをもた

ないが、若い小西がこれらの伝教師もしくはその教勢伝播の延長線上におり、アメリカン・ボードの宣教師もしくは同志社神学生らのそれと遭遇する機会と余り相違するものであったとは思われない。したがって、彼が「何と云ふ理由もなく」と回顧して述べているのは、後述のように、かかる二つの教派の一つ、ハリストス正教会の伝道に、たまたま出会ったことに由来してをり、そして、その上京はロシア語＝ハリストス正教を学ぶことであって、いわゆる単なる東京志向の上京、遊学ではもちろんなかった。

履歴書（甲）によれば「明治十四年　東京駿河台露国宣教師ニコライ氏設立神学校ニ入学」とあり、（乙）には「明治十四年　東京駿河台神学校ニ入学／同十九年　卒業」と見える。

さて、小西がニコライに「てほどきをして貰」ったのはロシア語であり、かつ、ハリストス正教であった。そこには、はじめ岡山の伝教師のニコライへの周旋があったであろうし、また、その経過のなかで、小西のニコライへの傾到があったと思われる。明治の末、小西は初対面の主教ニコライにその洗礼の経緯を次のように述べたとしている。

一八七九年春、私は日本の中国地方の海に沿った小都市で、たまたま正教会の伝教師の説くキリスト教の説教を聴いた。その説教の言葉は、若い私の心に強烈な感動を呼び起した。まもなく、私は大主教ニコライ師に最も近い同労者の一人から洗礼を受けることになった。その霊の教師から、しばしばニコライ師について聞かされたので、師の優れた人格に尊敬の念を覚えるようになった。……

一八八一年の冬、十七歳の少年であった私は、日本の使徒ニコライの学校で学ぶために東京に、向って出発した。東京について私は大主教ニコライ師に紹介された。師は非常に背が高く、立派な体格で、輝くような髪をもっていた――口ひげやあごひげは大きくなかった。(ママ)勢力的な容貌と独特な光を発する淡青色の眼が強い印象を私の上に残した。師は私を愛想よく迎えて、頭をなでて言った。立派な若者よ！とうとうあなたは私のところに来ました。わたしは以前からあなたのことを聞いていた……そして待って

いた。[8]

この回顧は、明治一二年の小西の正教への回心、洗礼のことを伝えて大切であり、その神学校入学は、ニコライがすでに承知しており、期待していたことを伝えて重大である。したがって、その上京は明らかな「理由」があった。

いま「強い印象」と「期待」のもとにおかれた小西の正教神学校――正規には七年間の教育課程[9]――生活の過程は、その詳細を知ることができないが、この間に小西但以理、ダニエル・ペトローヴィチ・小西は誕生、成長する。

三　ロシア留学

従来、小西のロシア留学については、「明治十九年（西暦一八八六年）の春特命全権公使西徳二郎氏に連れられてロシアに渡航し、同氏の保護下に学校生活をつゞけた。満五年かゝつて予定の課程を終へ、モスクワに出で、グロト教授その他の後援を得て心理学を専攻した」という彼自らの回顧記事が基本とされてきた。[10]

いま履歴書（甲）によってその記事を見ると、「十九年四月　特命全権公使西徳二郎氏ニ随ヒ露国ニ赴キ同年九月露国キエウ府中学校七年級ニ入ル／二十年　キエウ府中学校卒業直チニ同府神学部大学ニ入校／二十四年　同校卒業、宗教哲学ニ関スル論文提出　神学士ノ学位受領／同年九月モスクワ文科大学ニ入リ心理学哲学史専攻傍露西亜文学史研究」とある。したがって、そこには自ら語るその経歴に異同は認められない。

なお履歴書（乙）も併せて見ると、「明治十九年九月　露国キエウ府中学校八年級ニ入学／明治二十年九月　同府大学神学部入学／明治二十四年六月同校卒業宗教哲学ニ関スル論文提出学位受領（神学士）／同年九月　モスクワ文科大学ニ入学哲学史及心理学専攻」とあり、（甲）と比較して異同の認められるのは、西公使にしたがって入学する

経緯、ならびにはじめて編入した学年及びモスクワ文科大学におけるロシア文学研究の付加条項である。したがって、さきの回顧記事と関連して、その留学経緯が改めて検討してみなくてはならぬ問題となる。

ニコライ神学校では、その卒業生をロシア各地の神学大学や修道院にニコライ主教が選抜して派遣することが行なわれた。後述の留学中の小西の「露国通信」の記事を見ると、さきに選抜されて留学した三井道郎（神学士）、岩沢丙吉ならびに川崎、石亀一郎らの消息が寸見される。そのうち、三井道郎と岩沢丙吉は明治一六年にニコライ主教の選抜によった留学生（二回目）であった。[11] 現在三井や岩沢らをはじめとする正教神学校の卒業生の留学の経緯がハリストス正教会もしくはニコライのどのような管理、監督下におかれ、その留学経費の実際などはどうであったか知りえないが、おそらくその大概の費用がハリストス正教会あるいはニコライ主教が支弁するものであったことが想定される。

小西のロシア留学は『日本正教史』によると、明治二〇年に石亀（一郎）、源（珪蔵）らの三人であったとされ、別段第何回目の派遣留学生であるという記述はない。[12] しかも、その典拠は明らかでないが、小西は私費で留学したという見解もある。[13] 履歴書に見られる明治一九年に特命全権公使西徳二郎に随い、その「保護下」に勉学を続けたという、小西の留学経緯ならびにその出発時期とその経過は、実際にどうであったか。

もちろん、現在、その詳細な経緯、経過を知りうる都合のよい記録は渉猟しえないが、これをいやす記録は『正教新報』に連載された小西の「西遊記」である。

従来、この記事はまったく紹介されることがなかったので、その抄をかかげることとする。「西遊記」は『正教新報』の一七〇号（明治二一年一月一日発行）から一七三号（同年二月一五日発行）にわたって四回連載された。第一回目に

は編集者の説明があり、「小西但以理氏寄送の西遊記は疾くに掲くべきの所、本誌の都合に因りて遷延今日に至れり。読者諒焉」と見え、小西は六一日間にわたる旅行記を到着後間もなく、『正教新報』に寄せたことが知られる。

西遊記

明治廿年四月廿九日余将に西のかた露西亜に遊ばんとし、東京駿河台本会聖堂に於て神に航海の平安ならむことを祈り、主教の祝福を受け、直に新橋停車場に至る。此日風雨甚しきを冒して余が知己学友諸君の余を停車場に送られしは感謝に堪へざるなり。又二三の学友は余を送て横浜に至れり、然るに当日は風雨の為め船を出す能はず、翌三十日尚横浜にあり、五月一日に至り独乙船ゲネラルゴウデン号に乗込、同港を発し、神戸長崎を経て上海に至れり。余が此行は露国駐紮西全権公使が命を奉じて露国に赴くに偕にせり。

五月十日午前七時半香港に着す。香港は広東省近海の一島に在り、支那大陸を距ること纔に数町、実に東洋の一大良港也。（中略）午前九時上陸、西公使并夫人、湯池理事官、小野属官等に随ふて公園に遊ぶ。（中略）后領事館に到り、領事南某氏に面接す、一行共に午飯を饗せらる。次で南氏を辞し、ウイクトリア・ホテルに投宿す。午後六時公使理事官は小野属官と共に広東見物として小汽船にて赴かる。余は夫人に随ふて香港に止る。

十一日、香港には名所旧跡なし、唯一の博物館ありと雖も余り感し入るへきもなし。終日旅宿に呻吟し唯日の暮るを俟つのみ。

十二日、公使属官等広東より帰らる。此日午后汽船ヲーデル号出帆の報あるを以て午飯后調装、小汽船にてヲーデル号に到る、出帆に際し一楽連隊音楽を奏す、楽の始まるや纜を解き、錨を抜き楽の響に随て香港を出づ、時に午后四時也。

五月十三日晴、洋中に在り記すべきことなし。同十四日、香港以后は随分暑気甚し、此日よりして后は熱帯線内に多き驟雨屢々来りて船の甲板を洗ふ。同十五日、天気不定、遥かに安南の連山を望む。同十六日、天気不定、此日より余少く腹痛下痢三、四回、疲労を覚ゆ、此れ飲水に注意せさりしにあり、香港迄は我国同様の水なりし故、別に障りもなかりしが同港よりは水質かはりしを以て茲に至れるなり。俗に言ふ水あたりなり、旅行者最も此辺に注意ありたし。同十七日晴、午前七時新嘉坡に着す。朝饗后馬

車を雇ひ公園に遊ぶ。（中略）周覧歩行の後又馬車に乗りてホテルに至り、昼饗して帰船す。午后七時新加坡（マヽ）出帆、マラカ海峡に向て駛す。

五月十八日晴、遥かにマレイの地方を望み、スマタラ島辺を駛す、既に印度洋に入りしを知るへし。（中略）十九日、廿日、廿一日、廿二日、廿三日迄別に記すべきことなし。印度洋に入りてより常に逆風にて波高く、船揺きたるも、余は閉口せしことなし。唯何も見るものなく、退屈無事に苦むのみ。廿三日午后九時、コロンボに着、然れども日暮るゝを以て上陸せず。廿四日晴、早暁甲板に出ればコロンボ街の全景眼眸の中に在り、処々に旧教の会堂を望む。上陸せざるを以て何も知ることを能はず、唯港辺の景色を眺めし耳、聞く処に依れは釈氏の墓所迄七英里也と、同十一時同港を発す。（一七〇号）

五月廿六日、七日、八日、九日此四日間は、別に記すべきことなし。（中略）同卅日、天気不定、午前三時五十分頃甲板上に於て頻に騒動するやうすにて、何事が生せしやと思ふ内、一英人が狼狽（ワウバイ）しく室内に来り、大く驚きし体にてモーニー（金ノ事）、モーニーと叫び衣物を束ねて縦横に走せ回るを以て、余も大に心配して起きんとする頃、囂々たる一響船に在り、漸く強くして船の全体に及び、尋で連響二回にして汽船止り、機器の運転止む、是れ則ち吾人の大不幸にして汽船がアラビヤ海ソコトラ島辺の大暗礁に乗り上し也。余は直に他人同胞等に問ひ、直に公使并に湯池氏の室に至りて危難の趣を告ぐ、時に東方少く白み、貿易風強くして怒涛を衝き危険のさま言ふべからず。かくて海水段々と船底に入りて已に丈餘に及びたれば、船将ファー氏は船客をして荷物を仕舞、甲板上に出さしめ且浮袋を用意して甲板上に集めしむ、是則ち船体速に沈没せば船客をして伝馬に乗らしめ、之を島岸に送るの用意なるを知べし。此際僥倖にも汽船が嵓上に堅立して沈没の患なきこと分り、若風浪なからしめば一周二周の間は充分船体を維持するを得べきを知る。然れども頻りに伝馬の用意を為し、すはと言はゞ直に乗出して島に渡るべきを示せり。然して其前を望めば茫々たる洋海怒涛の来衝くを以て心安からず、若し急に救船に逢ふことなからんには船中に饑死するにも至らん、島に至らんか蛮人の食となるも知るべからず、加之激波怒涛の中何ぞ小舟の安然を期せん、進退維窮りて殆ど為す所を知らず、唯船将の命をまつのみ。午前七時の頃、一舟を装て一士官四舟子を之に乗らしめ、島岸に良地を求めしめたり（島岸を去る僅に二英里

余）。之れより先き、船中貯蔵の肉類函詰等悉く甲板上に排置して、渡船の用に供へ、彼の小舟の出でしより后は此舟が如何なる報をば齎し来るぞと、舶中一同待ちわびしに午飯も畢り午后三時頃に至り、小舟遥か彼方より帰り来るとの報ありしを以て海中を望むに、小舟にはあらで小舟に乗込たる一水夫が水間に漂ひて本船に向ひ、浪に従て遊き来るならば、漸くにして助け上け其様子を聞くに、帆走を試んとて小帆を揚しに忽ち覆没して一水夫は立に溺れ、残れる士官と二名の水夫は多分島に向て行きしならん、一名の水夫は跡に従ひ来りしが何時失せしか知らずとの事にて、一同失望を極め、唯た通行の船に助を乞んと頻に海上を打眺めいたり。此際船中の者共は彼処此処に集合して将来如何なるべき乎を談し安き心もなかりけるが、太陽已に地平線の上に日き夕霧茫々たる頃、遥か彼処の霧中に二本の檣顕れしかば、船中の喜一方ならず、実に手の舞足の蹈むを知らず、シャンパン酒などを饗し、唯彼船の近くを待たりしが、漸々彼船の近くに随ひ、其汽船たることも知れたりしかば種々の記号を以て救を乞ひ、或は大砲を放ち、或は花火を揚け、旗章を中檣に揚げて非常を示したり。早や日の暮るゝころ、彼の船は我船に相対して凡二里計の沖合に止り、花火を以救援を諾するを報ぜり、此時船長は一艇を艤して彼の船に遣す事を計らしめ、船客の渡船は翌三十一日の早暁と定めしを以て一同安心して休みたり、されど大抵の人は船の危きを回想し、恐らくは安き夢をば結び得ざりしならん。

三十一日の風波少しは鎮まりしも、小艇を用るに甚困難なるを以て其心配亦少からず、午前五時過、用意既に整ひしを以て第一艇に小児并に婦人を乗せ、第二艇には公使始め日本男子七人と外人二名なり、続て四艇を発し、船客并に船方等悉く救助船に乗移れり。救船は英国リウエルポリの商船サイクロフなりき。彼の小艇に乗り移ることは尋常一般の事にあらす、何となれば怒涛僅に鎮まりしと雖も、一丈半の高に至り、小艇を揺ること手球の如なれば也、故に別紙略図（図略す）に記す如く、前檣の一梁に縄を掛けて之に一小籠を繋く、漸く両足を容るへし、此籠中に入るや、水夫縄端を引き稍高く数尺に至るや器械を回して小艇中に釣り下ぐ、故に其苦労も甚く、且一物をも取る能はず、漸く身を以て乗るを得る耳。彼船に一同乗移りしは已に八時過頃なりしが（ママ）、船の方向如何と案じたりしにアデン港と極まりしに依り、一同安堵したり。九時頃ソコトラ島の東端を発し、アラビヤ指してぞ駛りける。此船は商船なれば万事不行屈なる耳ならず、大数の人員一時に増加せしことなれば船中の混雑一方ならず、食物さへ充分な

るを得ざるも、一同已に失ひし生命を復た得しこと故大に喜ひ合ひて共に愁眉を開きたり。

同六月一日晴、別に記すべきことなし。

同二日午前七時、無事にアラビヤのアデン港に投錨し、暫くして一同上陸、上等船客はウニウエルサル旅宿に、中等客はエウロツパ旅宿に案内す。ロイド商社其費用を負担することなり、余はエウロツパ旅宿に泊し、専ら疲労を止めたり、

六月三日晴、（中略）炎熱の甚きこと実に耐ふべからず、旅宿の内に呻吟して漸くに日を終ふ。同四日晴、此地にて名所とては殆となきが如くなれども唯た一つ実に珍きものあり、港を去る僅里許の処にして水溜ある所是也。之を見んとて馬車を雇ひ、早天旅宿を出で四、五十分にして彼の水溜に至る、山間嵓石の間を穿ち大小十二の水溜あり、（中略）英国政府が彼地在留の五千余兵士等の為に修造せしもの也と、然れども英人は唯た水溜を改良せし耳にして其元は猶太王ソロモンの創置せしもの也。（中略）帰路英国の兵営中を過ぐ、兵備頗る厳なり。同五日、六日、同七日共晴天にして毎日炎熱に苦む耳、別に記すべきことなし。（中略）此日午前兼て侍兼し以太利船着港との報あり、一同大に喜び、午飯を畢へ、午後四時半旅宿を辞し以太利亜船ラハイル号に乗組み、同七時アデンを解纜し、スエズを指して針路を定めしかば、夜に及で紅海の中に入れり。（一七一号）

六月九日晴、六月十日、同十一日、同十二日晴、常に紅海中を駛行す。（中略）時々岸近く難破汽船を見る、其有様を追想して不知々々汗背嘆息せり。同十三日晴、午后四時スエズに着、直に上陸す。已にロイド商社より汽車を備へて予等を迎ふ、日本人は悉く上陸す。船客中、望に依りて此船に残りし者半に過きたり。同八時同地を発し、夜、汽車にてアレキサンドリヤに向ふ、汽車の構造レールの据方頗る麁末にして車中殆ど安眠すべからず。殊に塵を飛して衣類帽等悉く半白となれり。同十四日午前七時、無事に一同アレキサンドリヤ港に着し、海岸に止る。茲に於て杉山牧野関等四氏に別れ、公使并湯池氏等一行八人スエズ旅宿に投宿す。杉山氏等四人直にロイド会社の汽船に乗込、イタリヤトリエストに向ひ、即日抜錨せらる。

六月十五日晴、此日買物ありて市街を徘徊し、一の洋服店に立入、色々買物を為せし際、一の司祭来るにより、番頭（少々魯語に通す）を通弁としてアレキサンドリヤ教会の成立を聞かんとせしに、通弁の不充分なるを以て一の手札を呉れ、之を以てアルヒ

マンドリトエウセウイーを一聖堂に訪ふべし、彼は能く魯語に通ずとのことなれば直に其堂に至りしに、随分大なる聖堂にて堂内万端我仮聖堂の模様に彷彿たり。此時三時課の奉神体執行中なるを以て、其終るを待ち、右の師父に逢ひ、先づ余が企望を嘶し、聖教会の組織を聞かんを乞ひ、且余の不幸遭難の顚末を略陳せしに、師曰く、爾は仏蘭西語に通ずるや、余曰く、否、師曰く、然らば致方なし、魯領事に付て聞くべしと言捨て一堂役者をして余を魯領事館に導かしめ、直に孰れへか立去れり。師素より魯語に通ぜざるに非す、而して余を魯領事に送る、魯領事何ぞアレキサンドリヤ教会の内情に詳かなるを得んや。奇怪千万と言ふべし。故に余は断然望を絶ち、其後ハ師を訪はざりき。（中略）此日魯国汽船会社を問合せしに、十七日出帆との事なれど夫耳待居たり。同十六日晴、唯市街を運動且見物せし耳。（一七二号）

六月十七日晴、午前十時汽船会社の下僕の案内にて公使并夫人等余に至る迄一行五人、汽船に乗込、湯池、小野両氏共に魯船に至りて訣別す（両氏はシチリー島并以太利を経て独国に至らるゝ筈なり）。汽船はコルニロワ号にて、我近江丸の如き大さなり、船長も士官等も能く船中の事を慮る。海上至て平穏なり。

仝十八日晴、午后の頃よりは既に希臘沖イヲニイ海の中なれば嶋々遥に見えていと景色よく、ヒワ島に一時碇泊、直に出帆して午后七時半スミルナ港に着、港内に投錨す。（中略）同十九日晴、午前十時前より上陸、処々見物、正午帰船、同午后六時前同港を出帆す。同廿日晴、船は亜細亜欧羅巴を隔つる狭き海の中にあり、恰も我利根川の如し、両岸の景況頗る佳なり。午前九時ダルダネルの海峡に至り、港辺に投錨し僅四五十分にして抜錨す。午后十一時コンスタンテイノーポリ港に着す。（中略）同廿一日晴、市街を眺望するに層々家屋を重ね、其間各処にマホメト教の堂宇高く聳ゆ、其美観言ふべからず。午后上陸、先つソヒー（公使并夫人に随従す）の堂に入る。外部は左程可驚にもあらざれども内部の構造其装飾の美なる建築用の大理石の逸物たる目を驚かせり。唯惜む土留古人の手にあるを。夫れより公園に至る、左程美なりとも不能申也。乍然市街の不潔なる殆どスミルナの如し、外観の美、内部の醜を平均せば蓋世界に驕るべからざるなり。（中略）午后五時帰船す。同廿二日晴、公使附添の婦人と上陸、ソヒヤの堂に至り。后市場を過きて帰船、午后六時出帆、（中略）同八時黒海に出づ。同廿三日晴、午后十一時船ヲデッサ港に泊す。

同廿四日朝、上陸、税関に至る。大前書記生の迎としてロンドンホテルに来り泊し居らるゝを聞く。暫くして大前氏出迎はる、共に馬車にてホテルに至る。（途中車の前に置きし余の荷物二個を着後番頭の不注意より盗取られ、全く着之儘となれり、巡査の手にて尽力し、其一品は已に発見せしも残品未不入手との趣也）。ヲデッサ港は随分立派なる港にて、兵備も厳重なり、港内に繋く大汽船は五十余艘なれども其孰れの所に在るや目立つことなし。

茲にて海路の行程尽きて、長き間苦みし暑気もなく、気候清涼の愉快に逢ふ。素より正教の国故聖堂も夥多あり、加るに言語も不充分なから解得し得らるゝものから、自然と不自由の感覚は去りて大に安心せり。ヲデッサ港に止る三日、同廿六日午后七時汽車にて廿八日キエフに着、廿九日モスコーに着、三十日午前十一時無事にサンクトペトルブールグの停車場に着す。列車も能便利に且動かぬやう出来居れり。停車場には岩倉代理公使并永山少将、書記官加藤氏等出迎はる。直に馬車にて公使館に到る。館はボリシヤヤモルスカヤに在り。

今回の旅行たる、五月一日に起り、六月三十日に止り、無慮六十一日の長きに渡り、加之途上非常の遭難あり、随分困難に苦労を重しが如しと雖も、皆真神の特恩に依り身体無恙（マヽ）なくして生命を全うせしは終身の僥倖というべし。唯た万事失ひし如くなれども左程可愁にもあらす、実に一度神の御手に捧けし生命なれば亦何の顧る所かあらん、只神意の儘に任せ奉るより外なし、此特恩を堅く心中に銘し他日を期して万事に勉強すべき耳と独り問はずがたりをなせり。（畢）（一七三号）(14)

この「西遊記」は、小西がニコライ主教の祝福をうけ、横浜を船出してから、ペテルスブルグに到着するまでの日録体の旅行記である。途中ソコトラ島における波乱万丈の遭難記事もあり、ロシア領に入ってからの安堵感のうかがわれるのも、ロシア語を学び、ハリストス正教を信ずる人の立場からであろう。さて、まず問題となるのは、彼のロシア留学のための日本出立時期である。さきにふれたように、回顧記事ならびに履歴書（甲）、（乙）とも、かれはそれを明治一九年のこととしているが、「西遊記」は、これを明治二〇年とし、しかも「西遊記」の記載はこれを疑

うべくもない。では小西がその日本出立の年をなぜ一年誤って記憶したのであろうか。筆者はそれは小西の記憶のなかに、特命全権公使西徳二郎とのかかわりが強く左右したのではないかと思う。

外交史料館に残されている西徳二郎の特命全権公使任命関係ならびに出立の記録によると、西は明治一九年六月三〇日付で特命全権公使に任命され、翌二〇年一月六日付でロシア国ペテルスブルグ在勤を命ぜられ、また同日付でスウェーデン、ノルウエーの公使兼任を命ぜられている。ところが、その年四月九日付で勲位申級の申請をしており、赴任のための出発予定は同月二三日であったが、勲三等に叙位されるのは四月二八日である。したがって、かれはその叙位後、五月一日に横浜を出帆している。彼の旅券番号は一〇六二六、夫人と子供一人を伴い、付添（女中）として植村ナカが渡航している。なお「西遊記」に見られる湯池理事官は北海道庁の役人であり、小野属官は随行として明治二〇年二月二一日付で旅券が発行されている。[15] これらのことから、西徳二郎が特命全権公使としてロシアに実際に赴任するのは明治二〇年五月であり、それは特命全権公使に任命されてから、ほぼ一年半を経過していることになる。その一年半にもわたることの詳細は、いまだ西徳二郎個人の記録の渉猟が不十分であり、[16] また小西の側のその間の折衝経緯も知ることができないが、小西のさきにふれたような回顧に見られる記憶の間違いや、履歴書記載の誤りのおもな理由は、かれが西徳二郎のロシア赴任に随行（同行）することが、その任命後はやくきまり、それが明治一九年中であったことから、うまれた誤りか、あるいは小西の履歴書が書かれた明治末年段階で、西の実際に赴任した時期が等閑視されて、特命全権公使に任命されたのは明治一九年であったという一般通例の記憶のみが定着して、小西がこれにわずらわされたという二つが想定される。

次の問題は、このロシア行における小西の立場である。さきにふれたように、小西は回顧の中で、西全権公使に

「連れられ」、その「保護下に学校生活をつゞけた」としている。それは西の外交官としての公的な立場においてなされるものか、あるいは西徳二郎個人の私的な立場においてなされたものであるか明らかでない。前者とすればニコライ主教による留学生派遣の性格はハリストス正教会の主体的な立場が埋没してしまっていることになり、それは事の性格上、あまり蓋然性が認められない。したがって、後者の可能性が有力であるが、西の保護下に学校生活を続けたことを証拠づける資料も乏しい。したがって、なおその立場を明らかにすることは困難であるが、さしあたって、さきの「西遊記」のなかで、上述の問題をうかがうことのできると思われるのは次の記述である。

まず、船がホンコンに到着したさい、「西公使并夫人湯池理事官小野属官等に随ふて」上陸し、「領事館に到り、領事南某氏に面接す、一行共に午飯を饗せらる」とあり、ついで、オデッサに到着したかれは大前書記生「出迎はる、共に馬車にてホテルに至る」とし、目的地ペテルスブルグに到着しては、「停車場には岩倉代理公使并永山少将、書記官加藤氏等出迎はる。直ちに馬車にて公使館に至る」と述べている。したがって、小西は終始公使一行の随行（同行者）の一人としての資格をもっていることが明瞭である、その立場は、孤独な留学生の一般の渡欧の姿ではない、それは外交官の庇護の下に、きわめて恵まれた立場であるといってよい。

このような小西の立場は、ペテルスブルグ到着後も続けられたことが窺われる。それは「露国通信」（在露国幾布小西但以理）と題するものである。これによると次のようである。

小生は特命全権公使西公に随ひ、六月卅一（ママ）日を以て帝都に入り、公使館に止ること廿有五日、叮嚀なる公使の過待を蒙り、帝都の名所は勿論近郊迄見物し、七月下旬帝都を去り、モスクワ府に至り、当時仝府に避暑中なる岩沢、川崎二氏及同府遊学生石亀（一郎）氏を訪ふ。恰も好し、三井（道郎）神学士帰航前来り会せらるに逢ひ同居旬許、同氏を送り停車場に至り、互に手を執り再

会を我国に期して立分れ、再び三氏の寓に止る旬餘、八月中旬を以て当キエウ府に着し、主教閣下の紹介状を携へペチェルスキ大修道院々長ユウエナーリイ師に謁し、同師の厚遇に依り同院宿部に止ること一ケ月にして神学校に一ケ年間入学するの手続整ひしかど、初年の遊学生には寄宿舎の模様等に依り健康上如何との心配なきにあらざれば、止宿を求めて通学することゝなり、乃神学校教師ミハイル修道司祭の周旋に依り神学大学教授ミ・ヒ・ヤストレーボフ氏方に止宿することに決し、九月下旬同氏へ引移れり。（下略）(17)

これによれば、ペテルスブルグ到着後、約一カ月間は西特命全権公使の下で便宜を万端与えられていたことが知られる。しかし、八月中旬以降、キエフの学校入学に関しては、西の周旋ではなく、ニコライ主教の紹介状でことは運ばれた経緯が窺われる。現在履歴書に記載されているキエフの中学校、大学神学部、そしてモスクワ大学の在学期間に関する当該諸学校の記録は渉猟ができないでいるので、履歴書に記載されているより、実際には一年短縮したと思われる現実の学歴、そしてその留学中の経済的生活の実態はなお明らかでないと言わねばならない。

四　トルストイとの老子道徳経の翻訳

小西がトルストイと老子の翻訳にたずさわったくだりは、その描写がトルストイの老子への共鳴や反発をいきいきと伝え、二人の訳語をめぐってのやりとりや、宗教上の論議、さらにトルストイの日常生活を写して、『トルストイを語る』のなかで迫力の満ち溢れた部分の一つである。年来、このおりの露訳老子を求め、これをえたことを機として複製された『老子』 Лодь Редакцией Л. Н. Толстого : Перевод съ Китайскаго д Кониси Jримечания С. Н. Дурышина, Москва 1913 に、木村毅は『トルストイ小西増太郎共訳　老子（ロシヤ原版複製）解説』という小

冊子を付刊した。木村はそのなかで、この小西の『トルストイを語る』を典拠にして、その解説をおこなっている。[18]

その筋書きは、よく知られているように、明治二七年一一月、小西のモスクワ大学在学中、かれはグロート教授の知遇をえて、老子の露訳をはじめ、これが契機となって、トルストイと老子の英独仏訳よりもすぐれた露訳老子という企図で、共同作業が行なわれた。そして翌年三月中旬にこの訳業を完了した。小西はこの訳業にもとづいて、四月、モスクワ大学における心理学会で「老子の哲学に就いて」と題して講演した。その講演は三カ月後、関係の有力雑誌である『哲学と心理学の諸問題』に掲載され、老子の訳文も引き続いて、同雑誌に発表され、さらに一二月には老子の訳文は菊判八〇ページの単行本として刊行された。その間、小西は九月一〇日頃にオデッサ港を出立して帰国の途につき、明治二八年一二月初旬、東京に帰ったというのである。[19] ただ、小西はその帰国の時期については、同じ回顧記事（『トルストイを語る』）のなかで、「我国の文学界でトルストイ伯の事を語るものが見え出したのは、明治二十四、五年の頃であった。私が永いことロシアに学んで帰って来たのが、丁度その頃であった」と述べ、[20] 前後が撞着している。

ここで、いささか筆者の私事にわたることをお許し頂くと、筆者は昭和四二年一月に開催されたトルストイ展の大阪会場の実行委員の一員であった。同会場には徳富猪一郎に托して、トルストイが小西増太郎に贈ったロシア語四福音書が展観され、その他小西に係るものが多かった関係で、小西の経歴を精査する必要を感じ、その結果、東京会場では試みられなかった小西の略歴を呈示することを行なった。そのおり、典拠としたのは同志社社史史料編集所が所蔵する小西の履歴書（乙）であった。履歴書（乙）の記載は先掲の明治二四年九月の項についで、ただ「明治二十五年十二月　帰朝」（学業）とあり、その後の関連する項は「明治二十六年一月　東京駿河台神学校哲学心理学論理学

教授ニナル」（職業）である。その結果、まずかれのロシア留学を終えて帰国した時期については、一つの証拠とすべきものをえたが、なお老子のロシア訳作業についてはなんらの言及がないため、何故に彼がそれを帰国後に相当する「明治二十七年十一月から翌明治二十八年三月まで約四ケ月間」としたか、[21] しかも、その翻訳の過程で、日時も明確に「一八九五年一月一日」として、トルストイの日常の生活を叙したのか、[22] 疑念はとけなかった。

しかも、疑団はさらに大きくなるばかりであった。それは一般に回顧記事より履歴書の記載に、より正確さがあるという通有の考えに基づくものであったが、その履歴書記載事項を真実であるとする立場をとると、さらに説明の困難な事態に遭遇したのである。

それは明治二六年一二月一五日発行、『基督教新聞』五四二号に牛後道人の名で掲げられている「露国思想界の近況」（雑録）であった。[23] それによると、「小西増太郎氏は東京正教神学校の教授なり。今より七年前、前西公使が露国に赴任するに従ふて同国に遊び、爾来常にキエフ、モスクワ等の学校に業を修め、苦学勉励、終に今回蛍雪の功を積み神学哲学の二科を卒業して此ごろ帰朝せられたるなり、余一日旧友某氏の家に於て氏に逢へり、氏余が為に其見聞するところの露国事情を語る。（中略）又た或る年の一月一日、余[24]（小西）は伯（トルストイ）の邸を訪ひたるに、折節伯も第に在りて午餐を喫し居りしが、直に余を食堂に導き茶など出して款待せられたり。余伯の食台に在る所の料理を見るに、甘藷、碗豆の湯煮各一皿とうどんを入れたる汁とのみ。（下略）」（傍点筆者）とあり、とくに「此ごろ」とした時期は新しく帰国した人に対面して、その談話を掲げるのに、どのように見積っても、この『基督教新聞』の発刊日より一年もさかのぼった時期の対談記事とは思われず、果して小西は何時帰国したのかという疑は晴れたようで、なおわだかまりの多い状態にあった。それは帰国の時期いかんによっては、トルストイとの老子翻訳作業の過程

にも、その疑を増幅するものであったから、なんらかの確証となるべき史料の渉猟が焦眉の急であった。小西の京都大学講師就任の事実から、調査の手を京都大学所蔵記録にのばしたのは、昭和五三年春のことであり、ここに履歴書（甲）なる史料をうることができた。もちろん、この問題にのみ固執したわけではなかったが、思えば十年の遍歴であったわけである。

さて、履歴書（甲）によると、この該当部分は「明治廿五年　孝経、中庸、大学、老子道徳経露訳成リ、モスクワ大学文科機関雑誌「哲学心理学ノ問題」ニ掲載、仝年　老子哲学研究書ト道徳経訳文ト併セ出版、仝年　モスクワ心理学会正会員トナル／明治仝年十二月　帰朝／明治廿六年一月　ニコライ氏設立ノ神学校ニ於ル哲学概論、心理学、論理学、美辞学教授」とある。

この明治二五年の項は履歴書(乙)には見られず、孝経、中庸、大学、老子道徳経の露語訳、雑誌掲載、出版のことを正式に伝えてきわめて大切である。そしてトルストイ博物館側の史料を駆使して研究をまとめたシフマンの『トルストイと日本』にも、「ダニイル・ペトローヴィチ・小西は一八九二年トルストイに、両者の共通の知人であるエヌ・ヤ・グロートによって紹介され、以来、トルストイ家の常客となった」とあり、[25] この小西の記載記事の年代と一致し、したがって、これでほぼ明治二五年に小西とトルストイとの共同翻訳作業が行なわれたと確信をもつにいたった。しかし、まだ問題は残った。その一つは、「一月一日」の回顧記事は何年のことであったか。次節で取り上げるように、小西の帰国の年代からすると明治二六（一八九三）年一月一日であったことも不可能ではない、また、その前年明治二五（一八九二）年一月一日も想定される。小西がことさらに、その年月日を指摘して回顧しているだけに、簡単にこれを捨て去ることは出来ない。そのことは小西がトルストイにはじめて会い、そして共同翻訳作業をはじめる

時期にもかかわることである。二つはシフマンの叙述によると、小西の帰国は「四年後に日本へ帰った」とあり、[26]それはあたかも小西の回顧記事に見られる明治二八年に相当し、これは後述のように日本側の『正教新報』の記事でその誤りが指摘される通りである。そうすれば、シフマンはトルストイ博物館の何の記録にもとづいて、その帰国を四年後としたのであろうか。三つめは末包丈夫のトルストイの日記ならびに書簡にもとづく研究に見られる、この間の経緯に関する論証との関係である。末包は一八九三（明治二六）年九月～一〇月にかけてのトルストイの日記あるいは書簡にもとづいて、トルストイの老子翻訳の経緯を解析しているが、上述来の経過からすれば、その前々年、すなわち一八九一（明治二四）年、そして九二（明治二五）年の日記が小西との共同翻訳作業からすれば問題である。しかも、それは現実にどのように書かれているのであろうか。なお、末包は一八九四（明治二七）年五月、小西の露訳老子がペテルスブルグの雑誌に発表された関係もあって、トルストイの老子改訳の仕事は完全に中止し、小西は「モスクワの雑誌に発表後、一八九四年末の一カ月許り、トルストイは小西氏の露訳老子の改訳にも協力している」としているが、[27]一八九四年発行の『哲学と心理学の諸問題』という雑誌、ならびに小西の Пао-си, Тао-те-кингъ, или Писание о нравственности と題する文献を渉猟して、これを解読する力は筆者にはない。しかも筆者にとって問題となるのは、「一八九四年末の一カ月許り」とする小西の協力であるが、何に典拠をおいているか知ることができない。いうまでもなく、「一八九四年末」はその経過からすれば、すでに小西の帰国後の日時に相当する。四つめは履歴書（甲）にも見られる明治二五年、「老子哲学研究書ト道徳経訳文ト併セ出版」が、木村毅の指摘するように、一九一三（大正二）年版しか残っていないことである。木村は小西の回顧にもとづいて、[28]「これがほしいと久しく念慮していたのだが、しかし、つぶさにしらべてみても、欧米のこの方面の研究家も、またどの書誌にも、この書

については一言もふれられておらぬので、今ではその刊否を若干疑問としている」[29]と述べている問題である。

これら四つの問題は、まだ現在の筆者には手の及ばないことどもであるが、小西の回顧記事が記憶の誤りにもとづいており、木村毅の解説はその誤った小西の記憶にもとづいて、老子道徳経の共同翻訳の日時的経過を解説したことは訂正され、克服されなければならぬことは明らかである。そして、それは概ね日本側に残存する文献・史料から可能である。しかし、新しく生まれる疑団の解消のためには、改めて、トルストイ博物館側の文献・史料、大きく言えばトルストイならびにその周辺の文献・資料の調査が進められなくてはなるまい。

また、本稿においては老子の訳の内容に立ちいって、トルストイの思想ならびに日本人小西の抱いていた東洋の思想に関する理解の問題にはふれえなかったが、これも東欧と日本の出会いを考える上で、きわめて重く、かつ大きい課題であることはいうまでもない。

五　正教会神学校教授そしてロシア思想界の紹介者

小西増太郎がロシアから帰国後、再び明治四二年ロシアに渡るまでの動静について、かれが『トルストイを語る』で述べている主要な点は、『国民之友』に掲載したトルストイの「クレーツエロワ・ソナタ」の翻訳に関する尾崎紅葉との興味深い出会い、ヨーロッパを巡遊する徳富猪一郎にトルストイ宛の紹介状をしたためたこと、その徳富のトルストイ訪問のさい、小西宛に托されたトルストイからのロシア語四福音書＝聖書のことなどである。またその間の動静で、とくに注意をひくのは、一七、八年ぶりで、トルストイに会ったとき、明治三一年にニコライ神学校を辞職し、爾後文筆からはなれたことを述べているくだりである。[30]

さて履歴書（甲）に見られるこの間の記載は、さきにふれたように、明治二五年一二月帰国し、二六年一月神学校教授になった後、「明治廿八年　神学校々長トナル／明治廿九年　辞職、参謀本部露国専門ノ雇トナリ三ケ月間勤務／明治廿九年六月　岡山県野崎武吉郎資産部総務トナリ明治四十二年八月迄勤務」とある。なお履歴書（乙）によると、学業欄には明治二五年一二月の帰国から明治四二年九月モスクワ文科大学に入るまでの記載はなく、職業欄にさきにふれた明治二六年一月神学校教授の記載についで、「明治二十八年　同校（ニコライ神学校）校長心得トナル／明治三十年三月　辞職　野崎武吉郎総務長トナル」とある。

したがって、二つの履歴書はその帰国時期は一致しているが、明治二八年のニコライ神学校における校長、校長心得の相違が見られ、また、その辞職は校長もしくは校長心得か、あるいは教授であるか明らかでない。また、神学校をやめ、上京以前にかって勤めたことのある郷里の野崎武吉郎のもとで実業に従事するか、その実業につく時期は一年の差違が認められる。なお履歴書（甲）には参謀本部のロシア語係の雇に三カ月勤務している。[31] これら二つの履歴書による限りでは、その年代を確定し、かつその間の身分をたしかめることは困難である。しかし、彼がロシアから帰国し、正教神学校教授として研究・文筆にたずさわった時期は、あまり長期間にわたるものでない、いわゆる「露国神学士」としてキリスト教関係の雑誌に掲載された消息記事、ならびにそれらに掲載されたかれの論稿、説教記事などによって、従来の疑団を解決し、はじめてその経過の大要をつかむことができる。

まずハリストス正教会の機関誌である『正教新報』を中心に見ると、[32] 明治二五年一〇月一五日発行の『正教新報』二八五号によると、「露国留学生の帰朝」と題して、「曽て本会附属神学校にて修業の上露国の神学大学に留学せられたりし川崎、石亀、小西の三氏は去る六月中に首尾能く業を卒へて帰朝の途に就かれたるが、多分今明日の中に着

京せらるゝなるべし」と見え、[33] ついで一一月一五日発行の同誌二八七号には、同じく「露国留学生の帰朝」と題して、「稍々時遅はしたれど、川崎、石亀の二氏には予期の如く去月十六日の午前に東京本会へ安着せられたるが、今一人の小西氏にはレウチス症にてモスクワに滞在療養中のよしにて、来春頃帰朝せらるべしといふ」と報ぜられている。[34] これは『トルストイを語る』に見られないことで、リューマチスのためにモスクワで療養のため、帰国がおくれたことを知ることができる。では小西の帰国の報道は『正教新報』にいつあらわれるかというに、明治二六年一一月一日発行、三一〇号に次のように報ぜられている。

留学生帰朝　五年前駿河台神学校を出てゝ露国に留学せられたりし行田クリメント氏は今夏キエフ神学大学校卒業、昨年夏同大学卒業の上、モスクワに滞在せられたる小西ダニイル氏共々海上無恙、去る廿九日午前を以て東京本会に安着せられたり、今又夏ペテルブルグ神学大学校卒業の庄司セルギィ氏も二氏と同船にて帰朝せられたれど途に熊本に立寄られし為一両日おくれて帰京せらるゝ筈なり。[35]

さきにも述べたように、小西はロシアからの帰国をその回顧で、これを明治二八年とし、[36] あるいは二四、五年ころともとれる記述をしており、[37] また、履歴書（甲）、（乙）とも明治二五年一二月としていることはすでにしばしば触れた通りであるが、しかし、このハリストス正教会の機関誌である『正教新報』の明治二六年一〇月二九日、東京安着記事はもはや動かし難い。したがって、（甲）、（乙）二通の履歴書もあやまった記憶にもとづいていることが知られる。明治の末年にいたって、小西が何故にかかるあやまった記憶をもつにいたったのか、いまその理由を知ることができないが、小西がことさらに、その経歴を詐称したとは思われず、その究明は今後の課題の一つにしなくてはならない。なお帰国年代の相違はその後の経歴、すなわち神学校の教授就任にも連動し、明治二六年一月神学校教授

となることもありえないこととなる。もちろん、同時に帰国するはずであり、すでに二五年一〇月に帰国した石亀一郎は教授となったことが知られるから、[38] 小西は実際の帰国前に神学校教授の辞令に相当するものをうけていた可能性もある。その点、ハリストス正教会の機関誌である『正教新報』には、前記石亀の教授就任に関する辞令記事はなく、なお精査を要する課題の二つめである。

さて、改めて帰国後の動静は『正教新報』や関係誌にどのように伝えられているか、以下順を追って、従来知られていない面に光をあててみよう。

(1) 雑誌『心海』は明治二六年九月二五日に発刊されたハリストス神学校の月刊機関誌であるが、[39] この三号からまず「老子哲学一班」が連載されはじめる。[40] この論文は翌年一一月、一五号まで、『心海』に一三回に渉って続載されたことしか知ることができないが、次の三点は小西の動静を窺う上できわめて大切である。第一は、その掲載の始期がかれの帰国の一カ月後というはやさにあたること、第二は、「老子哲学一班」という題は、いわばかれのモスクワ文科大学以来の研究課題であり、しかもトルストイと共同翻訳作業を進め、かれの心にあたためてきた宿構であったと思われること、第三は、この連載が後でふれるように、その間神学校におけるかれの位置（身分）が変化しても、なお続けられていることである。したがって、改めて「老子哲学一班」と、さきにふれた『哲学と心理学の諸問題』に掲載された論文とは細密な対比を行なわねばならない。

(2) 帰国の歳晩はあわただしく過ぎ、明治二七年を迎える。以後小西の行蔵は、さきの「老子哲学一班」の連載を進めながら、きわめて多忙である。すなわち、明治二七年一月一日発行の『正教新報』によると、「元旦の説教」と題する説教が掲げられている。[41] これは、あらかじめ新年号に掲げることを企図して案を練ったわけであるから、まさ

に新帰国者に矢つぎばやの注文原稿であったことが知られる。

その冒頭は、「皆様新年で御芽出度ムります。扨、年の始めを相互に祝ひ合ふと云ふ風俗ハ、東洋にも西洋にもあることでムりまして、其祝を陳る時には、年取った人は若き人に幸福を望み、若き人は年寄った人の長寿を願ひ、富だ人は貧い人に向て運の直るようにと云ひ、貧い人は富だ人に向て今一層富が増加ように申します、此は抑も何の理由原因あって然るものでムりませう歟。」という平易の語りかけにはじまり、その説教の要はただハリストスの信仰を奨めることにある。すなわち、「此の基督（ハリストス）によりて得られる幸福を達し得る仕方は明らかに神福九端にお示しになりて居ます。心を虚（むなし）うすること、己の罪や人の罪を悲しむの哀慟、温柔、飢る者の食を求むる如く義を求むること、矜恤、清心、真理の為に受くる難儀を忍ぶ抔と云ふ此諸徳を能く修むる時は、吾々の心の内に基督（ハリストス）は来りて己の殿堂となされるやうになる、而して既に左様なるときは基督に於て得られる真正の幸福は吾々のものとならん」とマタイによる福音書によって結んでいる。これはかれのハリストスの伝道に献身する立場を鮮明に示しているといえよう。[42]

(3) かれの動きはハリストスの伝道活動という限られた範囲にとどまるものでなかった。一月一五日発行の『六合雑誌』一五七号によると、「露国思想界の近況」と題して、新帰国者としてのロシア思想界の紹介・啓蒙の旗頭としても活躍する。この論稿は一五九号（三月一五日発行）、一六〇号（四月一五日発行）と三回に渉るもので、[43]その論旨の展開は西欧型・欧米型近代化路線に対する東欧型路線の提唱という思想性においても看過できないものがあると思われる。すなわち、かれはその冒頭において次のように述べる。

英独米仏各国に於る思想の運動は直に我国学者の注意を喚起し、社会の有様に影響する所あるも一（ひと）り露国の思想に至ては啻に識

者の注意を促すを得ざる耳ならず、我学者、有為家の度外視する所たり（中略）露国に於る思想の運動を目して、対岸望火の事とし、束手傍観すへきにあらざるなり。

さて、この一五七号は「露国史」の一〇世紀、一六、七世紀、一七世紀末期の「彼得大帝」の偉業、そしてカント、ヘーゲル思想の移入の四節にわかれ、一五九号は三節にわけて「ポヂテヴィズム」（唯物論）を論じ、一六〇号は三節にわかれ、まず、一八七四年のソロヴィョーフの「西欧哲学の危機」をとりあげ、次にトルストイをとりあげて「露国の哲学思想をして、狭隘なる囲範を脱して、社会の有とし、尚も、文事に通じ、時事に注意するの輩は、皆な、之に与るの道を、開きしものは文豪、レフ・トルストイ伯なり」として、これを高く評価する。もちろん、小西は「伯が、論せし処、穴勝ち、真理とは云ひ難し、伯は、素と、物に偏する性質を備ふる人なれば、其所見、必しも中正なりとはすべからざるなり」と述べて、トルストイ思想を全肯定する立場はとっていないが、トルストイ思想に触発されたとして、最後の一〇節では一八八五年に結成されるモスクワ心理学会に言及し、恩師であり、学会の会長である、グロートの名前も挙げ、「蓋し、遠からすして、露国は、全世界の思想をして、己れの力量を知らしむるに至るべし、且つ、数年を出ですして、露国の、宇宙観なる者の顕れ出ることあらん、吾人は、刮目して、露国思想家が、為す所を観、且その良結果ある日を俟んのみ。」と結んでいる。

この小西の提唱は大きな反響を呼び、思想界に一つのうねりを形成する。すなわち、まず『福音新報』一五三号（明治二七年二月一六日発行）に「トルストイ伯の立脚地（基督教の本旨）」と題する論稿があらわれ、[44] また哲学会は、かれを招いて講演を依頼する。『正教新報』三二〇号（明治二七年四月一日発行）の彙報欄には「哲学会の演説」が報ぜられ、そこには「神学士小西増太郎君は今回哲学会の請に由り、同会に入会せられたる由にて、去月（三月）廿一日

に文科大学の講堂に開会したる哲学会に於て「露国の哲学」と云ふ題にて一時間余の入会演説をせられたり。」と見える。[45]したがって、『六合雑誌』にその所論が続載されている間に、すでにその動きがあったことが認められる。

『基督教新聞』五五八号（明治二七年四月六日発行）にもトルストイを論ずる記事があらわれ、それは「トルストイ伯に対する反論」と題するものである。組合基督教会系の『基督教新聞』のトルストイの信仰批判は『福音新報』のそれとは論調・論点をやや異にするが、トルストイ思想の唱導され、それが急激に、さかんになる風潮に対応するものであることは明らかである。[46]さらに、『国民之友』にも小西の「露国と欧羅巴」、ついで「露西亜人と露国」と題する二篇が特別寄書欄に掲載され、ついで「藻塩草」には、かれの訳にかかる「靴師」がのせられる。それは当時、きわめて敏感に、蘇峰ならびに民友社がそのうねりの契機に着目し、またみずから、そのうねりを形成することに加担するものであったことを示している。逆に、小西は帰国後はやく、当代の一流誌にロシア思想の啓蒙、紹介者としての位置を構築しえたことを意味する。「露国と欧羅巴」において、かれが述べる姿勢は『六合雑誌』に展開した論旨と同じく、「露国が、欧羅巴にありとて、英、仏、独、澳各国と、同一の趣きを有する、国なりと唱ふるは、皮相の見、（中略）露国は則ち露国にして、欧洲にあらず、欧洲は、則ち欧洲にして、露国にあらざる也」と東欧への視点設定を主張するものである。[47]「露西亜人と露国」は二回に渉って連載され、そこではロシア人の性質、国柄の紹介がなされ、「露国は、英仏独澳の如き、既に、成年期を過ぎ、老耄期に近かんとするものと、日を同ふして、論ずべきものにあらずして、今や青年の初期にあり、成長の道中にあるものなり。（中略）〝後世可畏〟とは、蓋し本来の露国なる歟？」と述べて、注意を喚起しているものである。[48]「靴師」は「露国文豪レ・ニ・トルストイ伯著　日本小西増太郎訳」とあり、『国民之友』二三三号の附録に掲載された。[49]周知のように、『国民之友』がトルストイの作品あるい

は思想の紹介をするのは、これをもって嚆矢とするものではないが、小西にとって見れば、文筆をもって実際に見聞したロシアを伝える恰好の場所をえたわけであった。

(4) なお、ふりかえってハリストス正教会ならびに神学校における活動をみると、『正教新報』三一七号には「資産と基督教」と題してかれの説教が見られ、かれはそこで宝を天に積む考え、廉潔の徳、時間を浪費しないことを奨める。[50] なお、同誌の雑報、日本正教会記事には、小西増太郎君として、「同氏は学校教授の余暇を以て、下谷、浅草、本郷等の各教会に出張して布教に尽力し居らるゝ事なるが、又本郷竹町なる横井時雄君の大会堂にも依托(ママ)に応じて時々出張し演説せらるゝ由」(傍点筆者)と見える。[51] したがって、さきにふれたように、かれの神学校教授就任に関する辞令の記事は、これを見ることができないが、その教授としての活動は明治二七年二月初頭からはじまったと解してよい。しかも注意すべきことは、横井時雄の本郷教会にも出張し、演説を担当していることであって、かれのかかえたハリストス正教会の伝道の領域は組合基督教会系の新神学に傾倒した立場の人々とも交渉をもっていることである。すなわち、『基督教新聞』五五三号(明治二七年三月二日発行)には、「爾の信なんぢを救へり」と題して、ルカによる福音書(一五―四二)に基づく説教が掲載され、五六〇号(明治二七年四月二〇日発行)には「唯理的道義の欠点に就て」と題する説教が掲げられている。後者には「本郷会堂に於ての演舌筆記」とあり、これは恐らく『正教新報』の伝えている小西の横井応援説教のときのものであろう。ちなみに、その説教は「爾当純全如爾父在天者之純全焉」というマタイによる福音書(五―四八)によって、「吾人は此の神をもって標準すべきである」と奨めている。[52]

(5) 『正教新報』三一八号(明治二七年二月一五日発行)によると、『裏錦』一六号に、小西は「今川状と基督教主義道徳」という論稿をよせている。現在その『裏錦』を渉猟しえないので、論旨を知ることができないが、ハリスト

ス正教会において、いわば三面六臂の活動を展開していることになる。[53] それは同誌に見られる「神学校教授の伝教」によると次の記事があり、それを証することができる。

今回神学校の教授を担当せらるゝ神学士諸君には府下の伝教を思立ち去月十五日教員一同の評議会を開きてその事を議されし処遂に岩沢、石亀の両君は専ら教授の方に任じて傍ら心海の編輯を担当、行田君は学校の教授と幹事とを兼任し、荘司鐘五郎君、源珪蔵君、小西増太郎君、佐藤叔治君、司祭三井道郎君の五氏之を兼務せらるゝ事に決し直に主教閣下に申出でたるに閣下は直に嘉納せられたり。其伝教受持区は荘司君は牛込、源君は本郷、小西君は下谷、浅草、佐藤君は麹町、番町、司祭三井君は神田なりと云ふ。[54]

かかる外に向けての伝道のほか、『正教新報』三二一号（明治二七年四月一五日発行）には「聖母福音祭」で、かれは女子生徒に説教し、[55] ついで、三二二号（同年五月一日発行）には「救世主の事に関する預言と其成就」と題する説教をのせており、[56] まさにその身辺は多事多忙と称してよい。

(6) 明治二七年六月一日発行の『正教新報』三二四号には、神学校校長に就任している記事を見る。例によって、『正教新報』は学校の辞令類を掲げていないので、その正式な形を知ることができないが、次のように報ぜられている。

神学校新任校長なる小西増太郎君は去月十八日に神学校に引き移られたり。同氏は目下学校教授其他校務の外に毎夜下谷、浅草の両区内に出張講義せらるゝを以て一ケ月に四十回以上の説教をせらるゝ都合なりと云ふ。[57]

なお、同誌に掲載されている五月二七日付の広告によると「神学校生徒募集」記事があり、それには「東京神田区駿河台北甲賀町一二　正教神学校々長　小西増太郎」とある。[58] これらのことから正式に神学校校長となるのは、その日付は明らかでないが、明治二七年五月であったと推定される。したがって、さきの履歴書（甲）、（乙）とも、そ

の校長もしくは校長心得となるのを明治二八年としているのは、かれの記憶のあやまりとしなくてはならない。

この神学校校長在任中の活動記事ならびに執筆状況（『心海』誌上の「老子哲学一班」を除いて）を、列挙すると次の通りである。

○『正教新報』三二五号（明治二七年七月一五日発行）雑報、日本正教会記事　「府下四教会の懇親会去る五月下谷聖三者教会に於て湯川司祭管轄区内なる本郷下谷浅草本所四教会の懇親会を開きたるに四教会の伝教者執事其他信徒八十余名の来会者あり、鈴木補祭並に小西増太郎君の教話（下略）」

○『正教新報』三二六号（明治二七年七月一日発行）　説教　「宜しく主の悦ぶ所を察すべし」（大聖堂に於て、聖神降臨祭の翌日の至聖三者祭における説教）

○『六合雑誌』一六三号（明治二七年七月一五日発行）　論説　一六五号（同年九月一五日発行）「露国文学と文豪プーシキン氏」

○『正教新報』三二九号（明治二七年八月一五日発行）　雑報、日本正教会記事「東京下谷教会近況（中略）演説会は毎月第三日曜午後八時より開き毎会特約の弁士は神学校々長ダニイル小西君ら正教新報編輯者ペートル石川君並にセルギイ鈴木君等あり、来会者は大半信者にして其人数は不同なり（下略）」、「神学生徒の美挙（恤兵部に献金）、箱根塔の沢の神学校避暑館に滞在中の神学校生徒（中略）取締のため当地に滞在中なる小西増太郎の書信」

○『国民之友』二三三号付録（明治二七年八月二三日発行）藻塩草　靴師（前掲）

○『正教新報』三三一号（明治二七年九月一五日発行）　説教　「痛悔の名と実」（東京駿河台聖堂に於て、マタイによる福音書一八章二四〜三四）

(7)　しかし、小西の神学校校長はまことに短期間であった。すなわち『正教新報』三三二号（明治二七年一〇月一日発行）の雑報、日本正教会記事によると、突然次の報道が見られる。「校長辞職　小西増太郎君は神学校校長を辞さ

れたり」と。なお、同誌の報告欄に、次のようなかれの挨拶が見られる。

罪生儀事故あり神学校校長の職を辞し本郷森川町一番地字新坂三百六十二号に寓居仕候此段辱知諸彦に告く

廿七年九月十八日　　小西増太郎[59]

小西の校長辞職の「事故」が果して何であったか、かれ自身の回顧記事にも全く触れられていないので、[60]いまは知る術もない。しかし、その校長辞職後も、ハリストス正教会の機関誌である『正教新報』には、次に取り扱うように、なお説教欄に執筆し、また教役者としての活動も窺うことができるから、それが教籍を離脱しなければならぬ程の信仰上、行跡上のことであったとは考えられない。[61]

(8)　東京連合神学会とはハリストス正教会において、何を企図し、またいつ、どのような組織でできていたか、なお明らかにしえないが、『正教新報』三三二号――前項でふれたように、この号で小西の神学校校長辞職を伝えている――には、かれの該会における講演筆記である「第一世期(ママ)に於ける異端」が掲げられている。編集者はこれを「歴史的論文」と呼び、三三四号（明治二七年一一月一日発行）、ついで三三七号（同年一二月一五日発行）の三回に渉って連載、完結している。[62]小西の語りかけは「彼等も亦吾人と同き感情を備へし人也。熱切なる議論の際には間々局端(ママ)に流れ易かりし事なり（中略）苟も其敵方の事を論するに限りては絶対的の信用を置くに苦しむより、故に斟酌注意もて之に当る」とし、異端を見るのに、「教会の進歩を害せしのみ」、「教会の発達の母なり」の二つの立場を批判折衷する立場をとる。したがって、その信仰の姿勢に堅信、護教の「正統」派からすれば、自由な姿勢が見られ、いわゆる「高等批評」の自由神学的思想の影響が窺われる。しかし、『正教新報』の編集者が、かれのこの講演をその神学校校長を辞職した後も続けて連載したことから察するに、なお、ハリストスの伝道に、神学校教授として、かれが深

く、強くかかわるものであったことが明らかである。

しかも、『正教新報』三三五号（明治二七年一一月一五日発行）によると、「婚配機密」として沢辺琢磨司祭による、かれの結婚が報ぜられる。すなわち、「大岩マリア姉と本月七日麹町教会に於て沢辺司祭より婚配機密を領せられ（中略）伉儷華燭の典を挙げられたり」と見え、[63] ついで、三三六号（同年一二月一日発行）には「恩寵と徳義」と題する復活聖堂で行なわれた説教が掲げられている。[64]

しかし、残念ながら、さきにふれたように、『正教新報』の明治二八年の分を見ることができないので、その年の詳細は知ることができないが、明治二九年にいたって、その三六五号（二月一五日発行）には「貧富に就きて」と題する説教が見られ、さらに三七〇号（五月一日発行）にも同じく「死者に対する信徒の責任」と題する説教が、ついで三七五号（七月一五日発行）にも「人の使命と徳義」と題する説教が掲げられている。[65] しかも、かれの後で校長に就任した行田クリメントが急逝したあと、そのパニヒダ（墓碑）の建設発起人の代表となり、[66] その年七月、開催された正教会公会議に出席し、公会運営について発議しているから、[67] ハリストス正教会の神学校教授としての立場が続けられていたとみなければなるまい。そして、翌年、明治三〇年の公会議は神品の人たちだけの集会であり、また、集まった教役者の交名は『正教新報』で知ることができないが、翌三一年一〇月一五日発行の『正教新報』四二九号によると、大日本正教会記事に「本会附属諸学校近事」が報ぜられ、そこには岩沢丙吉、佐藤叔治、源珪蔵、西海枝静など、かれの同僚の名前は掲げられているが、小西の名前はない。[68]

したがってかれの神学校教授をやめるのは、明治三一年一〇月以前と推定される。いま、履歴書（甲）、（乙）が伝え、また回顧記事で述べる辞職時期は、それぞれ相違するが、（甲）の明治二九年とすることはあやまりであり、

（乙）の三〇年とするのも確証がなく、再会したトルストイにその経過を述べる「一八九八（明治三一）年に辞職」とするのが、あるいは当っているのかも知れないが、後考を待つより外はない。

(9) 前項で述べたように、小西の神学校を辞職する正式の時期は、これをたしかめることはできないが、まさにこの時期が露国思想界の紹介者としてかれが独立する時期に相当する。いま少しさかのぼって、その文筆活動を追ってみると次の通りである。なお、爾後小西の名前は急激に誌面からその姿を没してしまう。

○『国民之友』二四四号（明治二八年一月一三日発行）特別寄書「露国先帝亜歴山第三世」

○『六合雑誌』一七二、一七三、一七五号（明治二八年四月一五日、五月一五日、七月一五日発行）「露国文豪レルモントフ氏及び氏の世界観」

○『国民之友』二五九号附録～二六七号、二六九～二七一号、二七三号（明治二八年八月～一二月）「名曲クレーツェロワ」、尾崎紅葉共訳

○『六合雑誌』一八〇号（明治二八年一二月一五日発行）「トルストイ伯の所謂宗教に就いて」㈠、（未完）

○『心海』二九～三一号（明治二九年一月二五日～三月二五日発行）・「所謂メシヤ預言の価値」・（未見）

○『宗教』五二号（明治二九年二月五日発行）「露西亜に於ける基督教の起源」（承前）（前号未見）

○『獄事叢書』二三号（明治二九年二月七日発行）「露国の汽船中に樺太配流の女囚徒を見る」（特別寄書、『基督教新聞』六五五号でその掲載を知ることができる、未見）

○『六合雑誌』一八二号（明治二九年二月一五日発行）新刊紹介『露国一班』（警醒社書店）

○『基督教の礎』一四輯「基督信徒の行為」（特別寄書、『基督教新聞』六六〇号、明治二九年三月二七日発行でその掲載を知ることができる、未見）

○『国民之友』二九一号（明治二九年四月一一日発行）「露国の遣東使レーザノフ氏来朝顚末」（特別寄書）

○『六合雑誌』一八五～一八八号（明治二九年五月～八月）「宗教と徳義」。「本文はトルストイ伯の新著にして載せて昨春出版せられし伯の文集第一四巻にあり。其所論は六合雑誌第一八〇号に掲載したる「トルストイ伯の所謂宗教に就て」で小拙文中に述べたる処と略ぼ相類すれど、所説叮嚀、前文の欠を補ふ処少からざるを以て、更に訳出して読者の一粲に供す」と小西がしるす。

○『国民之友』三〇二号（明治二九年六月二七日発行）「スレトの珈琲店」（藻塩草、訳）

○『基督教新聞』六八三～六八八、六九〇～六九二、六九六～六九七、七〇二、七〇四～七〇六号（明治二九年九月一一日～三〇年二月二六日発行）文苑「日のあるうちに歩むべし」（トルストイの一八八七年作）

○『六合雑誌』一九〇号（明治二九年一〇月一五日発行）「彼得大帝と露国文学」、「露国現今の哲学界　其一」。後者は雑録に「こゝまゝ」という署名で収められ、其二（一九二号）、其三上（一九四号）、其三中（一九六号）と連載される。本稿は一八八七年モスクワ心理学会の創設に筆を起し、モスクワ大学グロート教授の紹介文である。

○『基督教新聞』六九四号（明治二九年一一月二七日発行）「かれに去る事を求めぬ」（説教）。ルカによる福音書八章三七節に基づく。

○『国民之友』三二五号（明治二九年一二月五日発行）「終極は近けり」（特別寄書、トルストイ論文の訳）

○『宗教』六四号（明治三〇年二月五日発行）「第三世紀の神学者オーリゲン及び其の宗教観」

○『基督教新聞』七〇六号（明治三〇年二月二六日発行）「基督に従ふべし」（説教）
○『国民之友』三四二号（明治三〇年四月三日発行）「ウラチミル侯以後の文学」（藻塩草）

この時期のかれの伝道活動は組合教会系の『基督教新聞』、あるいはユニテリアン系の『宗教』に、その説教ならびに教説の投稿が見られ、それはその誌面に自由基督教系の色彩が強い雑誌であったことに特徴があった。したがって、これは小西の抱懐するキリスト教信仰の推移をそのまま示すものであったとしてよい。小西が後年、原田助総長のもとで同志社に勤めることになる思想的なつながりも、したがって、その淵源は深く、かつ遠いといわなくてはならない。それはまた『六合雑誌』、『国民之友』への寄書とも同じ関係位置にあったと見てよい。

しかして、さらに注意すべきことは、かれがロシア留学者のなかで、ひとりロシア文から直接これを訳出していることである。小西のロシア思想界の紹介者としての特色は実にここにあった。しかも、かかる立場を保つことは、それ以前からのトルストイとの関係を保持することであり、それは、かれがトルストイの思想を究極においてどのように受けとめるかにかかる問題が介在することを意味した。

また、一方、ハリストス正教の伝道に従事し、その神学校において哲学、心理学、論理学を講ずることは、当時ハリストスも含めて、日本のキリスト教界が自由神学思想による神学上の動揺を招いていた混乱期とその余波の続いていた時期に相当していたから、自らの依拠する立場を何に決着せしめるかは、かれの大きな課題であったとしてよい。

かれが履歴書（甲）に見られるように、参謀本部露語専門の雇となり、あるいは（甲）、（乙）共通に見られるよ

うに、故郷にかえって野崎武吉郎のもとで、実業に従事することは、その理由、経緯をなお明らかにしえないけれども、かれがきわめて大きな信仰上の転機と考え、その転回を図るものであったことは明らかである。（未完）

× × ×

なお、履歴書（甲）、（乙）ともに、かれが明治四二年、再度ロシアに赴き、最晩年のトルストイに逢い、帰国して同志社大学講師となり、京都文科大学講師となり、大正三年これをやめる記載事項には不一致は見られない。

末尾に上述来の錯雑した年代の覚書をまとめてみるために、略歴一覧をかかげた。

（1） ア・イ・シフマン　末包丈夫訳『トルストイと日本』によると、小西増太郎の生歿年は一八六四年―一九二一年となっているが、彼の二つの履歴書は「文久二年四月生」とあって、それは一八六二年に相当する。なお、その誕生日の正確な記載はない。

（2） 「旧高等官講師履歴書　自大正二年八月　至大正七年五月　綴」（京都大学所蔵）に合綴された小西増太郎履歴書。

（3） 同志社社史史料編集所所蔵小西増太郎履歴書。

（4） 『備作人名大辞典』によると、野崎武吉郎は嘉永元年の生れ、製塩業に従事し、「精励事に当り、遂に岡山県をして全国に冠絶する製塩地たらしめ」たとあり、日清戦争後は台湾にも塩田開発の事業を進めたとしるされている。明治二三年帝国議会の開設に当っては、貴族院議員となり、地方実業家としてその徳名も高かったことが知られる。なお、『正教新報』一七七号（明治二一年四月一五日発行）によると、児島郡の野崎定次郎は明治一一年三月ハリストスの領洗をうけており、野崎の自宅が伝道の拠点であったことが知られるが、野崎武吉郎とどのような関係にあったか、調査がおよびかねている。

（5） 小西増太郎『トルストイを語る』（岩波書店、昭和一一年十月刊）。本書は表題の通り、小西とトルストイとのかかわりを主とした回想であるが、「序」の冒頭にその経緯がしるされている。

（6） 竹中正夫「岡山県における初期の教会形成」（『キリスト教社会問題研究』三号　昭和三四年一〇月）に収録されている。岡山に最初に訪れた宣教師はW・テイラー（Walace Taylor）であり、ついでアトキンソン（John L.Athinson）、ベリー（John C. Berry）らであり、さらにペティー（James H. Pettee）、ケーリ（Otis Cary）らである。

（7）『正教新報』二四号（明治一四年一二月一日発行）。なお『正教新報』の二九号（明治一五年二月一五日発行）には、「各地教会の近況」のなかで、「伝教者津田氏の任地なる備前岡山の教会にて、本月第一主日に新進者男二人女二人、同氏より啓蒙を受領せしとぞ」と見える。また『正教新報』一七七号には「児島郡正教会履歴」（教会報知）が見られ、明治一一年三月下旬野崎定次郎（聖名ニコライ）、荻野彦造（聖名イオアン）、田中耕平（聖名ルカ）のほか、男女二三名が「領洗」したとしるされている。

（8）小西増太郎「一日本人による大主教ニコライの追想」（『西日本正教』№29）『日本正教史』七二ページ参照。「露文雑誌・ハリスティアニン・一九一二年度の記事より、藤平重信訳」とある。なお小西は明治一四（一八八一）年ニコライ神学校入学のときをこの回顧談では十七歳としており、数え年逆算をすれば生年は一八六四年に相当する。生年を一八六四年とするのは、一にこれにもよると思われる。

（9）波多野和夫「ニコライと明治文化（上）」（『文学』四巻四号　昭和五四年四月）

（10）前掲　小西『トルストイを語る』序。

（11）波多野和夫前掲論文参照。氏によると、三回目として、佐藤叔治、樋口艶之助、西海枝静、瀬沼恪三郎らが派遣され、カザン、ペテルブルグ、キエフの神学大学に留学したとされている。なお牛丸康夫の『日本正教史』によると、三回目は樋口、西海枝、瀬沼の三人とある。

（12）牛丸康夫『日本正教史』六九ページ。

（13）波多野和夫前掲論文。

（14）『正教新報』一七〇号（明治二一年一月一日発行）、一七一号（同年一月一五日発行）、一七二号（同年二月一日発行）、一七三号（同年二月一五日発行）「西遊記」

（15）外交史料館所蔵史料。

（16）西徳二郎の伝記には『男爵西徳二郎』があるが、いまだ渉猟がおよんでいない。

（17）『正教新報』一七八号（明治二一年五月一日発行）。

（18）編集明治文化研究会　代表者木村毅　発行所日本古書通信社、限定四〇〇部刊、昭和四三年四月二五日発行。

（19）前掲　小西『トルストイを語る』の「老子道徳経の露訳」、「老子道徳経の翻訳はすゝむ」、「トルストイに訣れてから」、「久し振りにトルストイに逢ふ」の各節参照。
また別に小西「L・N・トルストイについての回想録より――上梓中の著書からの抜粋」（明治文化研究会編『明治文化研究第一集』所収）にも、その経緯の前半部分であるが、同様の記述がある。

（20）前掲　小西『トルストイを語る』六九ページ。

（21）前掲　小西『トルストイを語る』序。

(22) 前掲　小西『トルストイを語る』四八―五六ページ参照。

(23) 牛後道人「露国思想界の近況」（『基督教新聞』五四二号　明治二六年一二月一六日発行）
牛後道人が小西と会った時期は明瞭でないが、牛後道人は小西を正教神学校教授と呼んでいる。履歴書（乙）に根拠を置けば「此ごろ」はまさに「旧聞」に属することになる。なお、「今より七年前」として西公使に随行して出発したのは明治一九年に相当し、前節でふれたように、当時すでに明治一九年出立説が一般化していたことが知られる。

(24) 一月一日の記事は、まさにのちに『トルストイを語る』で「一八九五年一月一日」として回顧される記事の原形である。

(25) ア・イ・シフマン　末包丈夫訳『トルストイと日本』六〇ページ。

(26) 前掲書六一ページ。

(27) 末包丈夫「トルストイと老子」（『人文学』五四号　一九六一年七月、同志社大学人文学会発行）。

(28) 前掲　小西『トルストイを語る』の「老子道徳経の露訳成る」の末尾で、この単行本の運命にふれ、「単行本の題は『老子の哲学』――レオ・トルストイ監修、日本人エム・小西訳並序論――と銘うつて、モスクワの書籍市場に現れた。私はこんな専門的の本を誰も講読するものはないだらうと思つてゐたが、トルストイと云ふ美名があり、もう訳文の修正中から彼是と噂の種となつてゐたので、初版は瞬くうち売れてしまひ、再版が出たが、これも暫くのうちに絶版となつた。」とし、また小西が明治四二年から四五年にかけて、再度モスクワを訪問した際の古本屋の主人との店頭での会話をしるして、「その本がとうに絶版になり、もと七十コペックばかりしたのが、今では五ルーブルします。（中略）何故三版を出しませぬ」と本屋からいわれたこと、また、「それから一月ばかりすると、古本屋ニコラエルの知人だと云って、老子の出版を頼んで来たので、道徳経本文の訳だけの出版を承諾した。それと同時に心理学会からも第三版を出した」と経緯をしるしている。

(29) 前掲　木村毅『トルストイ小西増太郎共訳　老子　ロシヤ原版複製解説』五二ページ。

(30) 前掲　小西『トルストイを語る』の「トルストイに訣れてから」、ならびに「久し振りにトルストイに逢ふ」参照。

(31) ロシア留学者のたどった道については、西村庚「ニコライ神学校と露都留学生」（『ユーラシア』5、一九七二）、波多野和夫「ニコライと明治文化（上）」（『文学』四七巻四号、一九七九）などがその性格を述べている。

(32) 東京市神田区駿河台北甲賀町一三番地　愛々社発行の『正教新報』は明治一三年一二月一五日第一号を発刊し、爾後月二回刊行を続ける。現在これを通して見ることはなかなか困難であるが、筆者の渉猟しえたのは一～四九号（明治一三、一二、一五～一五、一二、一五）、一七〇～一九三号（明治二一、一～一二、一二、一五）、二〇一～二号（明治二二、四、一～五、一五）、二一〇号（明治二二、九、一五）、二一四～六号（明治二二、一一、一～一二、一）、二一八～三三七号（明治二三、一、一五～二七、一二、一五）、三

六二～五〇六号（明治二九、一、一五～三四、一二、一五）、五五四～九号（明治三七、一、一五～三、一）であり、とくに、いま三三八～三六一号（明治二八年全般）を渉猟しえないことは、小西の行蔵を見る上では大きな欠落を余儀なくされている。

(33) 『正教新法』二八五号（明治二五年一〇月一五日発行）雑報欄「日本正教会記事」。

(34) 『正教新報』二八七号（明治二五年一一月一五日発行）雑報欄「日本正教会記事」。

(35) 『正教新報』三一〇号（明治二六年一一月一日発行）雑報欄「日本正教会記事」。なお（23）で言及した『基督教新聞』五四二号（明治二六年一二月一五日発行）の牛後道人「露国思想界の近況」の記事に見られる「此ごろ帰朝せられたるなり」は、まさにその帰国直後の会見記事であることが判明する。

(36) 前掲　小西『トルストイを語る』六三～四ページ参照。

(37) 前掲　小西『トルストイを語る』六九ページ参照。

(38) 石川島監獄署吏員が明治二六年二月中ごろ、反正会という会を組織し、正教の光を普及させようとしたおり、石亀一郎は三井道郎ら神学校教授と名をつらねて行動を共にしている（『正教新報』二九八号、明治二六年五月一日発行）。なお、『正教新報』三〇三号（明治二六年七月一五日発行）に掲載されている神学校卒業式記事には教授として名をつらねている。

(39) 『正教新報』三〇八号（明治二六年一〇月一日発行）に毎月二五日発行の計画である「新雑報の発刊」記事があり、同誌は「広告」として、第一号の目次も掲げている。この雑誌の発行所は心海社であり、愛々社とは一番地違いの駿河台北甲賀町一二番地である。なお柳富子「明治期のトルストイ受容」（『文学』四七巻四号）は、この雑誌を男子神学校機関誌としている。しかし、石川喜三郎、「我邦思想界の形勢を観察して更に一新機関雑誌発刊の必要を論ず」（『正教新報』三〇六号、明治二六年九月一日発行）ならびに同誌三〇八号の「日本正教会記事」の「新雑誌の発刊」にも、「教会」の機関誌としており、当初は男子神学校機関誌ではなかった。

(40) 三号は一一月二五日に発行されている。小西のこの『心海』誌上の論文は『正教新報』三一二号（明治二六年一二月一日発行）の広告が初見である。

(41) 『正教新報』三一四号、雑報欄　説教。

(42) 小西の「基督（ハリストス）によりて得られる幸福を達し得る仕方」は、マタイによる福音書五章三節から一二節の聖句に基づいている。なお、小西の説教を奨める姿勢とトルストイの信仰との関係については稿を改めて問題としたい。

(43) 『六合雑誌』の英文目次によると、„Recent Condition of Philosophical and Riligious Thought in Russia" とあり、かつ小西の称号は「露国神学士」とある。

(44) この筆者は不明であるが、「露国のトルストイ伯と云えば、日の出の勢を以て、是より我文界に歓迎せられんとする人なること、何人も

之を知る、以前は英米の文界に於ても亦然るとありき。（中略）トルストイは（中略）かかる悟了を獲て『余の告白』を公けにし、かかる決心を以て『余が宗教』を出版せしなり。」と述べている。ただし、福音新報に掲載したこの論稿の筆者はトルストイに対してかかるトルストイの立場に「雖然考一考せよ」と賛成の立場はとっていない。しかし、小西の主張・立場とそれはきわめて類似している。

(45) 『正教新報』三二〇号（明治二七年四月一日発行）
なお、同誌三二二号（明治二七年五月一日発行）および三二三号（同年五月一五日発行）には、「露国の哲学」と題して、講演の梗概が掲載されている。これを見ると、哲学会における講演は『六合雑誌』に掲載された論文と同工異曲である。したがって、小西の論稿の反響を端的に示すものといえる。

(46) 『基督教新聞』は「海外事情」でこれを取り扱い、「トルストイ伯が基督の教に付て、一種特異の意見を抱ける事は世人の知る所也。即ち伯は基督山上の垂訓を尽く其文字の儘に解釈し、（中略）戦争は固より、凡て人に抵抗せざるを以て、基督の意なりと主張したり。（中略）頃日又英国発行の新評論紙上に於て、同様の説を吐いて、所謂正統教会を攻撃せしが、英国諸派の有名なる諸氏は同評論紙上に於て之を反駁したるよし。今其二、三を摘載すれば、（中略）要之、近時基督の教に付て、世人が一層注意研究する処あるは著しき事にして、甲論乙駁の間に於て、吾人の基督の山上垂訓の正当なる解釈を得るに至るは喜ぶべき事なり。」と述べている。
なお、小西自身がこのトルストイの宗教思想について特に言及するのは『六合雑誌』一八〇号（明治二八年一二月一五日発行）以降に見られるが、これについては本文の(9)節を参照されたい。

(47) 『国民之友』二二三号（明治二七年四月一三日発行）、特別寄書、小西の肩書きは「露国神学士」とあって、『六合雑誌』の場合と同様である。

(48) 『国民之友』二二五号（明治二七年五月三日発行）、二二八号（同年六月三日発行）特別寄書。肩書きは前と同じである。
なお、二二五号の書き出しは「明治廿年、初夏の事なりき、余は、露国留学の目的を以て、横浜西行せり」と述べ、オデッサにつくまでの旅行見聞である。さきに問題として取り扱った出発の年次は、この段階では明治二〇年初夏としるしている。

(49) 『国民之友』二三三号附録（明治二七年八月二三日発行）藻塩草。

(50) 『正教新報』三一七号（明治二七年二月一五日発行）説教。

(51) 『正教新報』三一七号　雑報　日本正教会記事。

(52) 『基督教新聞』五五三号は「行為の信仰によらないのは、丁度死体の霊魂を持って居ないと一般です（中略）信仰と行為は丁度鳥の両翼（中略）此二翼が終局の目的たる天国に人を乗せ送るのです（中略）忍耐して勤めれば急度（両翼が）得られます」とある。五六〇号の肩書には「露国神学士」とある。

(53) 『裏錦』の発行は『正教新報』と同番地であり、尚絅社から出され、『心海』と対応する姉妹関係の機関誌である。なお『裏錦』一九号（明治二七年五月一五日発行）にも「諸女中爾獲福矣」の投稿が見られる（『正教新報』三二三号）。

(54) 『正教新報』三一八号（明治二七年三月一日発行）雑報　日本正教会記事。なお、三一九号（同年三月一五日発行）に「府下の伝教」として、「佐藤、庄司、三井、源、小西の五氏は何れも毎度各受持教会内の旧信徒の宅に出張講義せらるゝ由にて、専任伝教者は力を得、信徒も大に満足」と報道されている。

(55) 四月六日の駿河台大聖堂における大祭日での説教（『正教新報』三二一号雑報　日本正教会記事）。

(56) 「何の感覚も喚起するに至らず奇異の念も起すことなく、空漠の裡に読過さるゝ趣あるは予の遺憾に勝へざる所」と述べ、「新旧二約の調和は臆説空論に非らずして歴史上活伝也」という信仰を披瀝する。なお、この論稿は何故か続稿は見られない。（『正教新報』三二二号論説）。

(57) 『正教新報』三二四号（明治二七年六月一日発行）雑報　日本正教会記事。

(58) 前掲誌広告によると、「（前略）六月三日迄に神学校々長宛に御申込み有之度候。最も右日限迄に志願者十五名に充さる時は募集相見合せ可申候、（中略）但志願者右定員に充ち候上は入校試験日限を広告すべし」とあり、「伝道師、儀友御中」としている。

(59) 『正教新報』三三二号には小西の校長辞職に関しては、雑報　日本正教会記事と、かれ自身の報告記事以外には何一つ言及がない。

(60) 前掲　小西『トルストイを語る』には、神学校校長の職についたことにも全く言及がない。

(61) 現在筆者は当時発行の『心海』ならびに『裏錦』に渉猟が及ばないでいる、関係の方々のご教示を乞う次第である。

(62) 『正教新報』三三七号（明治二七年一二月一五日発行）の「第一世期に於ける異端(四)」の末尾には「以上略述せし処は第一世期異端中の最も著るしきもの也、若し細微の異説を蒐集引挙せんとせば、蓋し一席の講演の能く尽す処にあらずと信す。故に謹て茲にこの講演を終ると云爾」と結んでいる。

(63) 『正教新報』三三五号（明治二七年一一月一五日発行）雑報　日本正教会記事。

(64) ルカによる福音書七章一一―一五にもとづいて、恩寵を受けるに勝へるように勤めなくてはならぬと述べ、その基礎は不屈千難不撓と云ふ忍耐をもって悪と戦うことにあるとする。

(65) 二月一五日発行『正教新報』にのっている「貧富に就きて」は、小西に社会問題としての貧富の関心は薄く、「之れ（貧）を以て神様が殊更下されたる教と心得、之を甘受するが肝要です。加之、今までのことを顧み、欠点を見出し、注意に注意をして、職に励み、業を営むべきでムいます」と述べている。しかし、この年九月になると、かれは片山潜と『六合雑誌』の編輯員になり（『六合雑誌』一八九号、明

治二九年九月一五日発行）、この時期がかれにおける一つの転機であったことを示している。

(66) 『正教新報』三七二号（明治二九年六月一日発行）日本正教会記事ならびに三七六号（同年八月一日発行）広告。

(67) 『正教新報』三七七号（明治二九年八月一五日発行）「大日本正教会公会議事録略録」ならびに三七九号（同年九月一五日発行）議事録続き。

(68) 『正教新報』四二九号（明治三一年一〇月一五日発行）以降には、小西の投稿記事ならびに大日本正教会記事にかれに関する言及は見当らない。

小西増太郎略歴

文中の○印のなかの数字は月を示す

年代	京大履歴書	同志社履歴書	『トルストイを語る』	諸文献
1862 文久2	④岡山県児島郡味野町3953平民に出生。	同左		
1871 明治4	上道郡国富村立小学校入学			
1874 〃 7	旧島田組事務見習となる	岡山市外操山小学校卒業		
1876 〃 9	野崎武吉郎事務員となる（味野町）	同左，秘書役勤務，14年まで		
1878 〃 11			ロシア語修学希望，上京，ニコライの学校で手ほどきをうける	ハリストス児島郡に伝道，初穂生まれる（正教新報177号）
1879 〃 12				
1881 〃 14	ニコライ神学校入学	同左		
1886 〃 19	④西徳二郎に従いロシアに赴く ⑨キエフ府中学7年級に入る	ニコライ神学校卒業 ⑨同左8年級に入る	春西徳二郎に従い渡航，西の保護下で学校生活（序）	
1887 〃 20	同上卒業，同府神学部大学入校	⑨同府大学神学部入学		⑤横浜出帆 ⑥モスクワ到着，西遊記（正教新報170～3号）
1891 〃 24	同上卒業，神学士学位受領 ⑨モスクワ文科大学入学，心理学，哲学史専攻	⑥論文提出学位受領（神学士） 同左	満5年で課程修了，モスクワに出てグロート教授の下で心理学を学ぶ（序）	
1892 〃 25	孝経，中庸，大学，老子道徳経露訳なり，機関誌「哲学心理学の問題」に掲載。 老子哲学研究書と道徳経訳文を出版。 モスクワ心理学会正会員となる。 ⑫帰国	同左		
1893 〃 26	①ニコライ神学校教授，哲学概論，心理学，論理学，美辞学を担当	同左		⑩帰国（正教新報310号） ⑪老子哲学一般（心海）（27年11月まで）
1894 〃 27			⑪老子道徳経を露訳，初めてトルストイに会う	①元旦の説教（正教新報） ⑥正教神学校校長（正教新報） ⑨校長の職を辞す（正教新報）⑪結婚（正教新報）
1895 〃 28	神学校々長となる	同校々長心得となる	③露訳完了，④学会講演，⑦論文雑誌に掲載，⑨オデッサに行く⑫老子道徳経上梓帰国（P.85）	⑧～⑪名曲クレーツエロワ（国民之友）
1896 〃 29	辞職 参謀本部雇（3カ月） ⑥野崎武吉郎資産部総務となり42年8月まで勤務		「クレーツエロワ・ソナタ」の訳出	②第六国民小説（共訳）（民友社） ⑨六合雑誌の編輯員に片山潜となる（六合雑誌）
1897 〃 30		③辞職 野崎武吉郎総務長となる	ニコライ神学校辞職（P.85）	
1898 〃 31				
1909 〃 42	モスクワに赴き大学に入る（2年間）	⑨同左	⑨モスクワ到着（P.77）	
1911 〃 44	①～⑦キリスト教聖地視察 爾後ライプチヒで勉強，⑪モスクワに帰る，ロシア実業教育実況取調	同在	43年7月ヤスナヤ，ポリヤナ訪問（P.94）	
1912 〃 45	④帰国，⑤同志社大学神学部教師，⑨文科大学講師（300円）	④同左，⑥大学講師，⑥社長事務補助（大正2年まで），④大学事務局主事（図書館主任事務）		
1914 大正3	⑨講師の嘱託をとく	⑥同志社辞職		